
あなたに届くまで

菘多紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたに届くまで

【Zコード】

Z2519Y

【作者名】

萩多紀

【あらすじ】

両親を亡くした優香は叔父のすすめで全寮制の学校へ編入することになった。ところが、その学校、一風どおりではないほど変わつていて……。

アメブロで連載中の作品を保存用として転載しています。

<http://ameblo.jp/akaibara-sirori-bara>
「嵐の海 暁の月」もよろしくお願いします。

『おじさま、お体の具合はいかがですか？

わたしは今、新幹線に乗っています。

篠田さんと、おじさまが勧めて下さった学校に向かひといろです。両親の葬儀以来、たくさんのお手紙をありがとうございました。

今まで一度もお会いしたことがなかったので、父に兄弟がいたなんて全然知りませんでした。

直接お会いしてお礼を申し上げたかったのですが、入院中でお会いできないとお聞きしたので、こうしてお手紙を書いています。

葬儀のあの手続きでは秘書の篠田さんに、とてもよくしていました。

大人の人がいないと分からぬ手続きもあったので、助かりました。

そういうえば、転校の挨拶に行つたとき、篠田さんは注目の的だつたんですね。

みんな、篠田さんのことを「素敵なおじさま」だと、盛り上がっていました。とくに、隣の席だった佐野さんは、「転校じゃなくて、お嫁にいくんじゃない？」とか、とんでもない」と言つてくれた

りしました。

田舎の学年一クラスしかない学校なので、みんな幼なじみのような家族のような人たちでした。お別れるのがとても辛かったです。あ、でも、誤解なさらないで下さい。決して今度の学校に不満があるわけではありません。学費まで出していただいて、本当に感謝しています。

がんばって、新しい学校に早く慣れたいと思います。

ただ、成績表を見せて差し上げると、おじさまのご病状に障るかもしれませんので、それだけはご容赦ください。

どうかおじさまのお体が一日も早く快復なさいますよう、お祈り

しています。

ほんとうにありがとうございました。

東雲優香『

カーブを曲がりきつた先の、田の前に広がった光景に、優香は息を呑んだ。

うつわあ。いきなりヨーロッパだ。

なだらかな山の間を切り開いたそこに、ヨーロッパのお城のような石造りの建物が並んでいた。

今までのどかな山の中をうねうねと走ってきたタクシーは、まっすぐにその建物に向かっている。

上品なアーチ状の正門は、タクシーが近づくと自動でゆっくりと開いた。

口が開いたまま閉じられなくなつた。

「あれ……ですか？ 鳳凰学院……」

「……学校案内によると、校舎は口口口調の宮殿をモーテルに造つたとのことです。なかなか豪奢ですね」

隣に座っていた篠田は、のんびりと穏やかな笑みで答える。

「校舎？ あれがですか？」

呆然としているうちに、タクシーは門をくぐつて、敷地内に進んでいく。

左右対称に広がる庭園の向こうに、まるで舞踏会の会場のような白亜の宮殿が威圧感たっぷりに佇んでいる。こんな普段着で入つてもいいのかと、優香は自分の服装を見下ろした。これでも一張羅のワンピースなのだけれど。

学校には到底見えない。といつより、あれが今日から自分の暮らす場所だとは信じられない。

ダークグレイの背広姿の篠田が、銀のフレームの眼鏡の奥から、思慮深い瞳を笑み混じりに細めて優香を見ていた。落ち着きを湛えた雰囲気で、年格好は四十歳くらいに見えるが、自称「まだ三十代」だという。

「まあ、たしかに、学校だなんて、言われないと分かりませんね」「もしかして、とってもお金持ちしか行けない学校ですか？ 貧乏人は帰れ、とか言わせませんよね？」

篠田は手にした『鳳凰学院のご案内』という小冊子に目を向ける。「……各種奨学制度もあり、幅広く入学生を募集しています、って書いてありますよ」

「でもでも。まさか、制服はマリー・アントワネット風ドレスとか言わないですよね？」

優香の脳内で、色とりどりの茶碗をひっくり返したような広がった裾のドレスを着た人たちが、軽やかにワルツを踊っている。手元に口をあてて、おほほ、とか笑つたりするんだろうか。パンがなければケーキを食べればよろしいのに、とか言つたりして。バツクに薔薇の花が飛んでたりして。

無理無理。こんなところで、生糰の庶民の自分にどうしちうというの。

優香は困惑というより、得体の知れない不安がこみ上げてきて、顔を引きつらせた。

不安マックス状態だというのに、タクシーは建物の正面にきつちりと停まった。

「大丈夫ですよ。優香様。普通の学校ですよ」

篠田が柔らかく微笑んだ。

「旦那様のお話では、鳳凰学院はさほど学費は高くありませんし、卒業生は大半が公務員や会社員だとか。校舎が豪華なのはパーティオ

グループがバツクアップしているからでしょう？

「パーティオグループって……あの？ 学校まで持っていたんですか？」

日本経済の半分に関わっていると言われる巨大企業グループ。優香のような世情に疎い学生でも、パーティオという名前のつゝ会社をいくつか知っているくらいに。

「ええ。才能のある優秀な学生を、優先的に傘下に入れることもできますからね。ですから、この学校には一芸入試システムも充実しています」

なるほど、そうしてチェックしておけば、優秀な人材を見いだせるということかもしない。優香は納得した。

「では、まいりましょうか？ 私が一緒できるのは、事務室までですが」

少し心配が混じった口調に、優香は大きく頷いた。

「わかりました。大丈夫です」

根拠はまったくないけれど、優香はそう答えた。

篠田は優香が両親を失ったばかりだから、とても親身になつてくれる。

だから、まだ会つていらない叔父もきっとこんな風に優しい人だと、優香は思っていた。

これから、ここで一人の生活を始めるのだ。その最初から躊躇けにはいかない。

一人で大丈夫、にならなくてはいけないのだ。

「せっかくおじさまが薦めて下さったんですから、がんばってみます」

優香が無理をしているのに気づいてか、篠田は少し困ったような顔をして、そして、もう一度微笑んだ。

校舎の中は予想に反して近代的だった。天井が高いくらいで、普通の学校の校舎に見えた。

良かった。中までキラキラぴかぴかだったらどうしようかと思つた。

事務室で引き合わされた上級生らしき女生徒は、紺色のジャージに身を包んでいた。

廊下で歩いている生徒達も、放課後のせいか、カジュアルな私服がジャージ姿だった。想像していた派手な服装の者はいない。優香は少し呼吸が楽になつた気がした。

「女子寮長の幸島杏奈です。この学校は多少普通の学校とカリキュラムが違いますから、分からることは何でも尋ねてください」

寮長と名乗つた少女は、身長は優香より頭一つ高く、すらりと細身だが、鍛え上げたような体つきをしていた。おそらくは何かのスポーツをやつているのだろう。

微笑みを浮かべていても、氣は抜いていないような油断のなさを感じさせる。黒いまつすぐな髪をきつちりと頭の後ろで束ねている。

「寮則などは冊子が置いてあります。それを読んで下さい。とりあえず部屋に案内します。女子は人数が少ないので、原則的に個室ですのです……」

言いながら向きを変えた背中を追つて歩き出したところへ、建物が揺れるほどの衝撃と爆音が響き渡つた。窓から見える向かい側の校舎の奥から、黒煙が上がつている。

同時にけたたましい警報が鳴る。

『緊急放送。東ブロック北校舎三号室手前廊下にて爆発事故発生。規模はレベルC。校舎倒壊の危険はありませんが、北校舎一階の廊下は通行不能です。担当職員が現在消火作業につき、北校舎一階廊下は通行不能。繰り返します……』

廊下を歩いている生徒達は、全く動じた様子はない。ちらりと窓の外に目を向けたくらいだ。

「何なの？ 今のは、爆発事故？ レベル？ つていうか、誰も避難しないの？」

優香はおそるおそる杏奈に尋ねかけた。

「……大丈夫……なんですか？」

「もちろんです。この程度なら、日常茶飯事です。自主消防設備も整っていますから」

……それはたしかにカリキュラム以前に普通の学校とは違う。つていうより、そんなことが茶飯事つて、どういうことだろ。困惑して、足を止めてしまっているうちに、杏奈はかなり先まで進んでいた。

置いて行かれると思って、慌てて早足でそれを追いかけながら、漠然とした不安がずつしりとのしかかってくる気分になつた。

何なのこの学校。編入試験も当たり前の学科試験で、さほど不思議な点はなかつた。

変わつてゐる、つてくらいじゃない気がする……。

「……大丈夫、か」

男は、冷笑まじりに、愛らしげ花柄の便せんを無造作に丸めて、デスク脇のゴミ箱に放り投げた。

狙いが外れて、紙くずは正面に立つていた篠田の足下に転がり落ちた。

「お返事は出されないのでですか？」

ゆつくりと丁寧な仕草で紙くずになつた手紙を拾い上げると、篠田は非難がましいことは口にせず、それだけを尋ねかけてきた。

「病人がそんなことをする必要はない」

「しかし、ただお一人の姪御様でしょうに」

「ばかばかしい。姪と言つても、あの男の娘だぞ？ あの男が何をしたか……」

「でも、もう、お兄様は亡くなつておられます」

「だから、その娘で多少の意趣返しをするだけだ。逃げ出した父親に代わつて、せいぜい苦労すればいい。鳳凰学院は普通の小姑娘の神経で耐えられるところではない。お前の役割は、『おじさま』がいかに期待しているかを言い聞かせて、学校から逃げ出せないようになることだ。幸い、誰に似たのか義理堅い娘のようだし。……わかつたな？」

篠田は黙つて頭を下げて、部屋から出て行つた。

一人になると男は、篠田が抗議するかのように机の上に置いていつたしわくちやの便せんに目を向ける。

初めて受け取つた姪からの手紙。花模様の絵柄に、いかにも女子らしい文字が綴られていた。

文面からしても眞面目で素直そうな少女は、全く疑いもなく、善意で『おじさま』が全寮制の学校を推薦してくれたと思つているのだろう。

そうでないと知つたとき、どんな顔で自分を見るのだろう。願つたことなのに、彼の心は今ひとつ浮き立たなかつた。

寮室は、ベッドと机とロッカーがあるだけのシンプルな部屋だつた。事前に篠田が発送してくれた段ボールが運び込んでいた。

「荷物の片付けは一人で出来ますか？」

案内してくれた辛島杏奈が問いかけた。

「そんなにありませんから、一人で出来ます」

「そう」

一つ頷くと、杏奈はふつと表情を和らげた。

「この寮では自分の事は自分で、というのが基本です。思ったよりしつかりしている人で良かった」

「え？」

「もう一学期も半ばでしょ？ いい加減みんな慣れて落ち着いたところだから。そこへ入つてもらつんだから、どう扱えばいいか考えてたの。慣れるまでは大変でしそうけど、がんばって。他の生徒たちには食堂や共用スペースで会うこともあるでしょうから、軽く挨拶はしておいてね」

そう言つと、優香の肩に軽く手を置いて、立ち去つて行つた。

……慣れるまで大変つて……。まだ何があるんだろうか？

持つていたボストンバッグを置こうとして、机の上にある冊子を見つけた。

なにげなくそれを開いて、優香は唖然とした。

起床六時、点呼六時十分……食事六時二十分。

何これ、この十分刻みのスケジュール？ 寮生活つてこんな感じなんだろうか？

それでも、ついていくしかない。

他に自分には行くところなんてないんだから。

……もう一日が終わったような気分。

翌朝、遅れる訳にはいかないから、と頭の中にたたき込んだスケジュールどおりに行動したのだけれど、朝食が終わるころにはすっかり気疲れしていた。

ありえないし、起床して二十分後だというのに、食堂にはきつちりと身支度した生徒がずらりと自分の席（食事の席も決まっているらしい）に並んでいた。入り口で戸惑っていると、寮長の杏奈が全員に優香を紹介して、席を教えてくれた。

女子生徒数はそんなに多くはない。三十人くらいだったが、全員が物差しでも背中に入っているかのように背筋が伸びていて、朝だからと眠たそうな生徒はいなかつた。

すごい。なんかしつかりした人ばっかりだ。

夕食は時間がまちまちなので、名前の書いたトレイを受け取つて好きに食べていいという話だったが、朝は全員揃つて食事、が規則なのだという。

……こんなに緊張してご飯食べたことないかも。

優香はそう思いながらも、ほとんど話しかけられることもなく、食事を終えたのだった。

そして、まずは職員室に向かうべきだろうかと校舎棟の前で迷っていると、一人の少年が優香に歩み寄ってきた。

「ええとー、シノノメユウカさん？」

力の抜けたような、というより、力があるんだろうか、という声。

……地縛霊？

優香は思わずそんな失礼な印象を抱いてしまった。ビビとなく存在感が薄くて、風が吹いたらどこかに飛んでしまってそうな雰囲気の持ち主だった。

上品な細面で色白の少年は、力の入っていないへろへろした声で、自己紹介してくれた。

「僕は一年一組のDグループのリーダーで、早見夕樹と申します。どうかよろしく。職員室までご案内しますー」

「はい……よろしくお願ひします」

思わず頭を下げようとすると、相手は手のひらを田の前でひらひらさせた。

「堅苦しいのはナシにしましょー？ 東雲さんは、Dグループに入ることになつていますので、僕がお世話をいいつかりましたー」

「この学校のカリキュラムで一番特殊なのは、グループ制というシステムだった。」

生徒は四、五人のグループを組み、選択授業をのぞいて、すべての活動をその単位で行う。そのグループの評価が成績評価にも関わるというのだ。メンバーは一年間替わることはない。

毎月ランキングが発表され、上位グループは当番免除など優遇されるらしい。

職員室で担任教師に挨拶すると、相手は複雑そうな顔で「まあ、がんばれ」とよくわからないことを言つてくれた。

教師というより、夜店で焼きトウモロコシを売つていてそうな若い教師は、すでに秋に入っているというのに、アロハシャツと半ズボンとビーチサンダル姿だった。

「分からないことはグループのメンバーに聞いてくれ。基本的にうちの学校は生徒任せなんだ。ただ、セクハラとか、暴力とかは教師の管轄なんで、報告してくれ」

「わかりました。あの、一つ伺つていいでしょうか？ 先生の担当教科はですか？」

担当教科というより、本当に先生なんだろうか。

そう思つたが、相手はむしろ人なつっこい笑顔で答えた。

「オレは格闘技射撃コースの教師だ。うちを選択するんなら歓迎するぜ。つと、そういうば選択科目の届けがまだだつたな。来週までに出してくれると助かる。見学したい科目があつたら、そいつに案内を頼むといい。校舎が広いから、慣れないと遭難するからな」遭難？ たしかに敷地面積は普通の学校よりはるかに広そうだつた。校内のあちこちにレンタサイクルが設置してあつたりするのも理解できるほど。

それにしても、格闘技？ 射撃？ そんな教科まであるんだろうか。

教師は時計をちらりと見てから、ノート片手に腰を浮かせた。
「早見、今朝は職員会議があるから、彼女を教室に案内してくれ。どうせ午前はグループ活動だから、クラス全員に引き合わせるのは無理だろうし」

「あいあいさー。ガツテン承知の助三郎ー」

なぜか敬礼して答えていたが、口調は脱力感いっぱい。

「じゃあー。行きましょうか」

彼は、へなつと力の抜けた笑みで、優香を見た。

「……肩の力は、抜いてね」

そう言われて、優香は緊張していたことに気づいた。

彼は優香が気を張り詰めているのを知つていて、笑いかけてくれたらしい。

「……飼育係ですか？」

「うん。いきなりで悪いけど、今月、うちのグループが飼育係になつてるんだ」

並んで教室に向かいながら、早見夕樹は説明してくれた。
現在、優香の所属することになるログループの仕事は飼育係、な
のだそうだ。

「一番ポイントが少ないグループが、雑用専門つていうか。仕事は
日に一度飼育小屋に行つて、小屋の掃除とかえさの在庫チェックと
かするんだけどね……。僕は今日、用事があるから無理だけど、他
の連中が手伝つてくれるからね」

「飼育小屋つてことは、動物を飼つているんですね。ウサギとか…
…？」

優香の通つていた小学校には飼育小屋があつた。インコやウサギ
がいたような気がする。

けれど、高校で飼育小屋、といつのは少し珍しい気がした。
「……ウサギつて……いたかな？ 毛色がウサギっぽいのは居たか
も……」

夕樹は首を傾げて、深刻な顔をする。

「え？ ジやあ、二ワトリとか……？」

「二ワトリ……みたいなのはいるけど……大きさが違うしー」

悩んでいる。一体、どんな動物を飼つているんだろう。

けれど、基本的に動物が嫌いではない優香は、それ以上訊かなか
つた。あとでどうせ目にすることになるのだから。

Dグループは現在男子四名。リーダーがこの早見夕樹で、南暁彦、
殿田イサキ、三宮青龍といふ名前だと教わった。

「みんな、女の子が入るからつて張り切つてるよー」

夕樹はへらへらした口調でそう告げる。生命感じてしこうか、

変というか。

この人、朝ご飯、ちゃんと食べたんだろうか。

優香は全く別のレベルの心配をしていた。

教室で紹介されて、初めて引き合わされたメンバーは、共通してどことなく変だった。

「オレ、殿田イサキ。何でも分からないことがあつたら聞いてね?」「オレは南暁彦。嬉しいなあ、野郎ばかりのグループなんて飽き飽きしていたところだよ。まるで救いの女神に見えるよ。何でも頼りにしてね」

イサキと暁彦はそろつてにこにこ笑いながら言つ。いたずらつ子がそのまま高校生になつたような風貌のイサキと、軽薄そうな柔軟な顔にナンパな口調の暁彦。見た目は全く印象が違う。

夕樹が一拍置いてから、ため息をついた。

「ええとね。一応言うけど、他のことはともかく、この一人に勉強のことは聞かない方がいいよ。赤点大魔王と補習大明神と言われてるから」

やんわりと抑揚のない口調で、手厳しいことを言つ。二人はまったく怒る様子はない。

つてことは、多分本当のことなのだろう。

夕樹はそれから机に両脚を載せて、不機嫌そうに外を睨んでいる生徒を指差した。

「それと、窓際で不満そうな顔してるのが、三宮青龍。勉強の成績はいいけど、人間関係の構築には失敗してるつていう困つた人……一匹狼気取りつていうのかな?」

……聞こえるつて。絶対それ、聞こえてるつて。

優香はひやひやしながら、相手と夕樹を見比べたが、予想した事態にはならなかつた。

こちらの会話は聞こえているんだろうに、三宮青龍は顔をこすりに向けもしない。

怒つたり突つかかつたりしてくるのならまだしも、無視ですか？
ずいぶんな非友好的な態度だ。

見れば、どこかの王子様かと思つほど、品のいい整つた顔をしている。細面に高い鼻梁、鋭い刃物のような光を帯びた褐色の瞳。外見はともかくとして、その雰囲気はいただけない。寄るな触るなという、ぴりぴりした空気が周囲を漂つているのだ。

ハリネズミのような人だ。優香は内心そう思った。

……せつかくかつこいい顔しているのなら、笑えばいいのに。もつたひない。

転校生というのは、珍しいイベントの一つだというのに、一見らを見ようともしない。

「……まあ、彼のことは気にしなくていいから。あいつは誰彼構わずまんべんなく公平にああいう態度だから
ちつともフオローになつていない。優香は何と答えていいものか悩んでしまつた。

そして、夕樹はメンバー全員を見回して、さうに巨大な爆弾を投げ込んだ。

「あ。それとね。午前中はグループ活動の時間だから。本日は、第一体育館のワックスがけと、グラウンドの草むしり。ジャージに着替えて下駄箱に集合」

全員がげんなりとした顔をした。窓際にいた青龍も、心なしか眉間の皺が深くなつたような気がした。

「……それが授業なの？」

「そう。れつきとした授業だよー」

夕樹はそう言つて笑う。

……やっぱり、この学校つてずいぶん変。

優香は改めてそう思つ。

午前中いっぱいをワックスがけと草むしりで終えて、午後は普通の授業が行われた。

けれど、どことなく他のグループの生徒達は、夕樹たちDグループに対して冷淡に見えた。逆に優香に対しては同情的な態度だったが。

「よりによつてあのグループに……」

そういう言い方はないだろう。優香は午前中のグループのメンバーの言動を見ていて、青龍はともかく、三人とも個性的だが、嫌な人たちではない、と思っていた。

途中編入という立場の優香に気を使つてくれるし、仕事もちゃんと教えてくれた。

……まあ、青龍って人はややこしいけど。なにしろ、仕事はするのだが、全く協調性はない。遠く離れた場所で、黙つて草むしりをしていた姿が目に浮かぶ。

どうやら、Dグループは問題児揃いという評価らしい。

そんなことない、と言えるほど、彼らを理解できていないので、優香は返答に困つてしまつた。

一日の授業が終わると、夕樹が飼育小屋までの案内がてら、学校内の施設を説明してくれた。

鳳凰学院は四つのブロックに別れていて、高等科と中等科は南ブロック、大学は北ブロック。体育館やグラウンドは西ブロック、研究施設が東ブロック。

「東の第三ブロック北校舎にある研究棟は、ヤバイからね。用事がない限り、特に北校舎に近づくのは止めた方がいいよ。」

「爆発するから？」

優香が訊ねると、夕樹は、ピンポン、と力なく言いながら笑う。「あそこで爆発物処理とかの実習もするから。まあ、ホントに危ないことする時は、事前に避難通告があるからいいけどね。」

そんなことやってるのか、この学校。

優香は昨日田を通した学校の規則やら案内の書類に、緊急避難の仕方やら、万一の場合の対処法が事細かに書かれているのを見て、ある程度察していたつもりだった。

普通は、核シェルターの使用法や、病原菌汚染の注意書きまでは書かれない。

授業や校内の様子 자체は、さほど風変わりには思えなかつた。制服も普通の紺色のブレザーだつたし。

「東雲さんは、選択授業はどうするの？」

夕樹に訊ねられて、優香は持つていた書類にもう一度目を向けた。担任教師にも言われたけれど、その選択授業といつのが困りものだつた。

この学校は授業の大半が選択授業とグループ活動にあてられてゐる。その選択授業のリストも凄かつた。生徒の数以上に授業の選択幅があるなど、普通ではない。

「まだ考えてない。こんなに沢山の選択授業なんて、初めて見た。

体育系に法学、看護……軍事？ 外国語……

「選択するつていうより、そういう特性のある生徒が入ってくるとコース作って対処するつて感じだからねえ……。クラブ活動と思って、気楽に選べばいいよ

なるほど。部活動の一環くらいに考えれば、やってみたい教科を選べばいいのか。

優香はそれなら美術芸術コースの中から選ぼう、と考えた。絵を描くのは好きだから、絵の道具だけは寮に持ってきているから。

ふと、夕樹が顔を上げた。

「あ、そっちの大きな建物が飼育小屋だから」

夕樹が指差したのは、かまぼこ型の屋根の、巨大な鉄工所のような建物。西ブロックと東ブロックを分断する道路のすぐ脇にある。

「……小屋？」

飼育小屋、というのはもつと慎ましやかな建物だと思っていた優香は、確認するように指をさした。

「うん。一応。入り口に道具とエサがあいてあるから。これは一応注意書き。あとは他の連中が来るはずだから、教えてもらつて一緒にやつてね。これは、飼育係用の物品庫の鍵」

そう言つと、夕樹は鍵を手渡すと、他の校舎の方に歩き出した。優香は漠然と不安を抱いた。

巨大な鉄の扉には太い鎖で鍵がかけられていた。その隣に普通サイズのドアがある。ドアには危険、近づくなという表示がいくつもしてある。

手渡された紙に書かれている文字に、一度目を向けてみた。

『注意書き。すべてのドアにはロックがかかっています。小さいドアが通用口で、出入りは原則そちらからしましょう』

「……」

入り口の脇に飼育係用、と書かれた部屋があつて、その周囲に肥料の袋を思わせる大きな袋が山積みにしてあつて、マジックペンで「エサ」と書かれていた。

時間厳守、と張り紙をされた部屋の中には、まるで宇宙服のよくな銀色のスーツと、スタンガンや銃が入つていた。

「……これ、本物の銃？」

入つていても、せっかくだけど、使い方分からないし。いつたい何に使うの？

『原則単独行動禁止。武器携行の者と二人以上で入ること。油断は禁物。麻酔銃の残弾数は必ず確認のこと』

『背を向けてはいけない。奴らはこいつの隙を狙つてくる』

……飼育係の注意書き、だよね？

優香は首を傾げたまま固まってしまった。

周囲を見回しても、誰もいない。青龍はともかく、暁彦とイサキが来るはずだと夕樹は言つていた。この部屋の鍵は優香が持つているし、スーツや道具はフックの数に隙間なく並んでるので、すでに中に入るのは考えにくい。

来るまで待とうか、そう思つた瞬間、建物の中から爆音にも似た音が聞こえてきた。

「……？」

これ、もしかして、中で飼っている動物の声？

食事の時間が近づいているなら、飢えて騒いでいても不思議ではないが、一体何の声なんだろう？

お腹を空かせているのなら、可哀想だし。

優香は中の状況を確かめるべきだろ？か、と思いついた。

通用口の鍵は、物品庫の中にあった。単独行動は禁止、という言葉を思い出したが、見るだけなら、と鍵を握りしめた。

ドアを開けて、その脇にあつた電気のスイッチを入れた。そうして、一瞬言葉を失つた。

目の前にあつたのはいくつも並ぶ見上げるような高さの巨大な檻だつた。その中を数頭の生き物が落ち着き無く歩き回つていて。その生き物はそれぞれ奇怪な姿をしていた。

トカゲに似た鱗に覆われた身体、その背丈はキリンよりも大きい。その隣には羽毛のような毛に覆われた蛇のような生き物がのたうつていて。その胴体は優香のウエストの数倍はある。

そうした生き物たちを見て、優香は恐怖よりも、自分の正気を疑いたくなつた。

ありえない。

ドラゴン？ 恐竜？ なんなのこれ？

しかし、相手は食事を待ちかまえていたらしく、優香を見て、檻に身体を押しつけるようにして、吠えかかってくる。

『中の生き物はとても大型です。肉食のモノもいますので、うかつに檻の傍に近づいてはいけません。特に長い爪を持つ種類のヤツの傍には、エサを置くときも決して油断しないでください……エサのやり方は……』

注意書きには、決して中の生き物がウサギやインコのよつた平和な生き物だとは書いていない。

これは、現実だ、と理解したとたんに、優香は身体が震えた。

三宮青龍は、学生寮への帰り道、ふと、掲示板に張り出された追試予定者のリストに目を留めた。

殿田イサキ、南暁彦、おなじみの一人組の名前がある。おなじみすぎて、驚きもない。

追試予定日は、今日の午後四時から六時。

「……」

早見夕樹は、今日の放課後、実習で出かけると聞いていた。ということは、あの転校生は、誰と飼育係の仕事をするつもりなんだ？

「……って、オレか？」

「冗談ではない。自分が今までそうした係など一度も加わったことなど無いのは、彼らだって承知しているはずだ。

ただ、彼らがお互いに、飼育係の仕事が出来ないことを知らずに、彼女を飼育係の仕事に送り出したら？

青龍は眉根を寄せた。

「……つたく、面倒臭え……」

一応様子は見ておいたほうがいいだろう。死なれると面倒だし。

青龍は来た道を引き返した。

普通の女の子なら、あの中の生き物を見ただけで、パニック起こして逃げ出すだろう。

だから、そうしてくれていれば問題ない。

『おじさま、お加減はいかがですか。

無事に転入手続きは終わりました。クラスの人たちは優しそうな人ばかりです。

グループ分けはDグループになりました。わたしのほかはみんな

男の子で、それぞれ性格も雰囲気も違う個性的な人たちです。

今日は飼育係の仕事を教えてもらいました。鳳凰学院は、大きな動物を沢山飼つていて、立派な飼育小屋があるんです。当然工サも沢山食べるから、運ぶのは大変です。

でも、喜んで食べている動物たちを見ているととても幸せな気分になりました。

ただ、ちょっと疲れてそのまま外で寝入つてしまつたみたいで、気がついたら保健室に連れてこられていきました。誰が運んでくれたのかは分かりませんが、初日から人様に迷惑をかけたのではないかと、心配になりました。

外部活動、という授業があつて、来週は外で行われるそうです。まだ詳しい話は聞いていないのですが、なるべく早く慣れようと思ひます。

おじさまもお体を大事になさつて下さいね。

東雲優香

翌朝、教室にはいるとすぐ、男三人がそろつて深く頭を下げてくれた。

「ごめん。昨日、連絡不足で。彼らが昨日追試受けてるなんて思わなくて。オレは別件で動けなかつたけど、後で分かつて。……大変だつたよね？」

「いじめとかじゃないから。ホントごめん」

優香はやつとのことで、飼育係のことだと思い当たつた。

彼らは故意に優香ひとりにさせたわけではなく、お互いの用件を確認していなかつただけだつたのだ。

「大丈夫。私、力仕事得意だし」

優香はそう答えた。三人がそろつて目を丸くした。

「だつて、アレ、見たんだよね？ 怖くなかった？」

「オレたちだつて、飼育係が回つてきたら、円形脱毛症になりそう

な気分なのに」

「……」

たしかにあそこの生き物には驚かされた。

ただ、何とかエサを配らないと、という事に必死で、怖いことが二の次になっていた。

「あそここの動物はどつかの研究所がやつた違法な実験の産物なんだよ。詳細は知らないけど、殺すのも可哀想だからつて、うちの学校の理事長が保護したんだつて噂だよ」

「ああ……」

だから、図鑑には絶対載つていよいよような動物だったのか。優香は納得した。

やつぱり、普通の生き物ではないらしい。

十数メートルの体高を持つライオンの顔をした虎とか、十メートルを超す翼を持つ蛇とか、見たことのない生き物ばかりだつた。「でも、最初は怖かつたけど、人なつっこいところもあつたけど。『ちょっと待つてね』って言つたら、檻に体当たりするの止めてくれたし。ちゃんとお座りして待つてたのよ。特にあの白い鳥の羽根のついた蛇さんは、大人しくていい子だつた。知らない人が入つてきたら、向こううだつてびっくりするよね。だから、餌をくれる人つて分かつてくれたと思うけど」

優香がそう言つと、男達は、引きついたような顔をした。

「ありえない……ぜつたいそれ、ドリーム入つてるよ

「そう……かな？」

優香は首を傾げた。

とはいえ、自分は昔、近所で恐れられていた猛犬を唯一恐れなかつた子供だつたし、動物に噛まれたり襲われたこともない。

「じゃあ、今日の放課後、もう一回やつてみればいいよね？」

優香は自信を持つてそう言つたのだが、三人は呆然とした顔で言った。

「東雲さんつて……やつぱり、普通の子じゃなかつたんだ……」

「やつぱ、うちの学校に来るよつた女の子だしー」

「だよなあ……」

優香は首を傾げた。

「どういう意味？ この学校って、そんなに変なの？」

自分でもうすす変だとは思っていたが、他の生徒達からそれを聞く機会がなかった。

夕樹が不思議そうに優香を見た。

「だつて、ここは、パティオグループが国の委託を受けて、特殊能力を持つ学生ばかりを集めた学校だよ？ 通称、正義の味方育成機関。普通の人間が誰一人いない学校だよ」

「はい？」

「この学校の生徒は一芸に秀でた者ぞろい。将来、刑事事件の捜査とか、要人の護衛とか、国家政策とかに協力できる人材を集めているんだよ」

そんなの聞いてない……っていうか、そんな学校があるなんて知らなかつた。

「……もしかして、知らずに編入してきたの？」

イサキが問いかけてくる。優香は頷くしかなかつた。

「だつて、両親が死んだから、寮のある学校がいいんじゃないからて、叔父様が薦めてくださつたのが、ここだつたから」

「へえ」

「全寮制の学校ならもつとフツーのところがあるだろ？ ……」

夕樹がぼそりと言う。

「だよねえ。最初見たとき、ちょっとびっくりしたよ。この学校の女子はとんでもなく強い人多いからねえ。ずいぶんとスバルタな叔父さんだなあ」

暁彦が頷く。優香は大きくかぶりを振つた。

「そんな」

両親を失つて途方に暮れていたとき、叔父の秘書篠田が現れたとき、救世主かと思つたくらいだ。

書類の手続きも言われるままに必死で書き込むだけで、何をしなければならないのか、何をするべきなのか、全然分からなくて。

「……きっといい人だと思う。」病気とかでお会いできないんだけど

「病気なんだ。それは大変だな。もしかして、うちの学校の外の評判だけ聞いて手続きしちゃったのかもしれないな。でも、試験に通ったくらいだから、東雲さんはただ者じゃないはずなんだけどねー」

そこまで言ってから、夕樹が思い出したように言葉を句切った。

「そういえば、選択科目、どうするの?」

「とりあえず、芸術関係のコースをいくつか……あと一つ埋まつてないんだけど」

優香は鞄から記入してきた用紙を引っ張り出した。鉛筆画とCGの科目を選んだのを見て、夕樹が頷いた。

「鉛筆デッサンのコースなら、暁彦も取つてるからね。絵が得意なんだっけ？」

それを聞いて暁彦がひょこっと顔を向けてきた。

「え？ どんなの書いてるの？ 見たい見たい」

「……」

優香は戸惑つた。たしかに絵を描くのは好きだし、美術の先生にデッサンはほめられたけど、自由に描いた物は何故か一様に絶句されるのだ。

多分、ボタニカルアートに影響を受けたのが原因だと思つただけれど。

「……驚かない？」

「何？」

仕方ない。見せない限り引かなさそつた暁彦の表情に、優香は鞄からスケッチブックを引っ張り出した。

嬉々としてそれを受け取つて開いた暁彦が、そのままフリーズした。

「あー、やつぱり。

優香はそう思つたが、脇から覗き込んだ夕樹が軽く目を見開いた。

「これって……妖怪？」

「妖怪の絵をね……リアルに描いたらどうなるかなーって……」

奇妙な間を置いて、わずかに引きついた笑みが返ってきた。

「うん……リアルだね。っていうか、リアルすぎてすごく怖いんだけどこの絵」

「……やつぱ、東雲さん、うちの学校に入れるわけだ……納得した」「え？」

「どういう意味なの？ そう思つたけれど、とりあえず悪口ではなれやうだと自分で納得することにした。

夕樹が不意に思いついたように、顔をこじらに向けてきた。

「ね。あと一つ選択科目が取れそうなら、僕の入つてるところに来ない？」

「え？ 何のコースですか？」

「犯罪学のコースでね、プロファイリングとか習つてるけど、君、モンタージュづくりとか興味ない？」

モンタージュ。犯人の手配書とかに使うあれ？

それはすごく正義の味方っぽい気がして、優香はどきりとした。興味あるけど、難しくないんだろうか。

……でも、この一風変わった学校に早く慣れるためには、尻込みしていたらダメだ。

「似顔絵のことですね……？ やつたことないけど、できるかな」「うん。そんだけリアルに描けるなら、似顔絵とかモンタージュの才能あると思うけど」

「……じゃあ、それにします」

そう答えると、夕樹が嬉しそうに頷いた。

風が吹いたら飛んでいきそうな夕樹が、プロファイリングというのも予想外だつたけれど、この学校の生徒は何か突出したものを持っている人たちなのかもしね。

見かけと違うとか、イメージで考えちゃダメなのかも。ふと、相変わらず少し離れたところで本を親の仇みみたいに睨んでいる青龍が目についた。

この人も……何かきっとすごい人なんだよね。

優香がそう納得しようとしたとたん、青龍がふと目を上げた。

「青龍。お前その日、超マジ怖え。『めんなー、東雲さん。』いつ昨日どつかでコンタクトレンズ落としたらいじくて、機嫌悪いんだ」「……」

「コンタクト? もしかして、すうい日で睨んでる、と思つたのは、コンタクトが無くて見えにくかつたせいなんだろうか。

「放課後帰つてくるの遅いから、女子でも口説いてるのかと思つたら、何かにぶつかつて落としたんだって。眼鏡はどうしたんだよ?」

「寮に忘れた」

「ぼそっと不機嫌を隠す氣のない声。

「青龍。そんなんだから顔だけの残念王子だつて、女子から言われるんだよ」

どうやら、青龍の方は人を寄せ付けたがらなくとも、暁彦や夕樹は彼と距離を置いているわけではないらしい。

「どうか、思つたよりは仲がよさそうに見える。

夕樹が苦笑いを浮かべた。

「ああ、言つてなかつたけど、男子寮は四人部屋でね、基本グループごと同室にされるんだ。だから、お互に気安いといえば気安い関係なんだよ」

「……いいなあ……」

優香がそう呟くと、相手が驚いた顔をした。

最初に言葉を返してくれたのは暁彦だつた。

「そつかー女子寮つて個室だよね。じゃあ、ケー番交換しない?」

「あ、そつか。忘れてた。そつしつけば昨日みたいな行き違いはないんだよね」

「言われて優香は戸惑つた。

「わたし、ケータイ持つてないから……」

周囲に持っている人が少なかつたし、親からのお小遣いで通話料とか払えそうにないから、ねだつたこともなかつた。あこがれはいたけれど。

「そりなんだ。じゃあ、番号とメアドだけ教えてあげるから。寮の共用電話があるよね？」

暁彦は手帳に番号を書き付けると、優香に差し出した。

「じゃあ、僕のも」

夕樹が横から手を伸ばして、さらに書き加える。

「サービスで青龍のとイサキのもつけとこ」

背後で青龍が嫌な顔をしたが、夕樹はまったく気にしない様子で全員の電話番号を書き込んだ。

「もしケータイ買つたら、番号おしえてね」

優香はなんとなく、その一枚のメモ用紙が、彼らの仲間に入れてもらえるチケットのような気がして、大きく頷いた。

その日、寮に帰り着いたら、荷物が届けられていた。

昼間のうちに直接誰かが届けにきたのだという。中にはかつちりした楷書で書かれた手紙が入っていた。

「……篠田さん？」

部屋に戻つて箱を開けると、真新しい携帯電話が入つていた。

『僭越ながら、携帯電話が必要になるのではないかと思い、お届けさせていただきました。そちらの校則では、授業中に使用しなければ所持は認められていることです。なお、私の電話番号とメールアドレスを登録させていただいているので、何かありましたらこちに連絡をいただければと思います』

篠田は優香が携帯電話を持つていることを知つてゐる。今までの友達と離れた暮らしに、電話が必要になると察してくれたのだろうか。

メール、してもいいんだろうか？

優香は慣れない手つきで何とか短いお礼の文章を書き込んで、送

信ボタンを押した。

間を置かずには返信は返ってきた。

『無事に受け取っていただけたようで何よりです。お友達はできましたか?』

優香は思わず、はい、と呟いた。

自分は幸せだと思う。両親を亡くして一人になつた、と思つたけれど、ひとりぼっちにはなつていないのでから。

『おじさま、お加減はいかがですか。

学校にもだいぶ慣れてきました。

先日は校外活動という授業がありました。学校に来た依頼に応じるという授業なのですが、Dグループは駅前商店街の書店の万引き対策がテーマだそうです。

リーダーの早見夕樹くんは犯罪心理学のコースを取っているそうなので、犯人の行動を予測した棚の配置を決めて、書棚を作り替えました。

デザインは南暁彦くんが担当して（服飾デザインとかが得意なんです）、殿田イサキくんと三富青龍くんが模様替えを担当しました。見かけによらず、殿田くんは力仕事が得意です。びっくりしました。三富くんはとても几帳面で、本の順番を全部覚えていてきっちりと並べ直していましたから、店長さんからぜひ卒業後に来て欲しいとスカウトされていました。

本棚の高さを低くしたり、見通しをよくしたりしたので、悪いことをしにくいよくなつたと思います。万引きというのは、本屋さんの経営まで危うくするんだけど、早見くんがわかりやすく教えてくれたので勉強になりました。

グループ活動というのは、それぞれの特技がよくわかるというのを感じました。

飼育係も慣れてきました。ちゃんと動物たちは言つことを聞いてくれるようになつたので、あだ名をつけてあげることにしました。一号とか二号とか、そんな味気ない名前はかわいそうなので。

そういえば、篠田さんが携帯電話を届けて下さいました。おじさまが料金を負担して下さると伺いました。お礼が遅くなつて申し訳ありません。

同じグループの人たちが、メールアドレスを教えて下さつたり、

グループ用のチャットルームを作つてくださつたので、寮に戻つてからもお話ができるとても便利です。

もうすぐ期末考査があるそうです。おじさまの病状に障りないようになつたよ。

東雲優香より』

「先月分のポイントランキングにより、Dグループは栄えある学年最下位になつたやうで……。飼育係をやらないもう一ヶ月承る」とになつたよ」

夕樹が力なくそう宣言した。

ちょうど青龍以外のメンバーがそろついていた。思わず優香は大喜びしてしまいそうになつて、他のメンバーのため息に気づいた。

飼育係の仕事の分だけ、課外の選択科目の授業が受けられなくなるし、部活動にも行けなくなるからだ。

優香はさほど多くの科目を採つていないので、影響はないけれど。「でもね。今回のランキングで希望が見えてきた。最下位だけど、一つ上のAグループとのポイント差が大きく縮まつてるんだ」

「あー。それわかる。最近あいつが珍しく協力的なんだよ」

イサキがにやりと悪戯っぽい顔で笑う。暁彦も頷いた。あいつ、というのがこの場にいない青龍だというのを見当がついた。

「だよねえ。前は割と『出てきても何にもやんないぞオーラ』が出てたからな」

「やっぱ女子がいると、格好つけたいお年頃じゃないんですか？ つてオレらも同じようなもんだけだ」

そう言つて優香に目を向ける。

「え？」

「差別とかじやなくてね。女の子がいると、がんばつちやう生き物なんだよ。男つて」

夕樹がへろんとした口調で言つ。

「そんなわけで、この感じの点差をもう少し縮めるべく、期末テストでの赤点を減らしてポイント稼ぎをしたいと思います。本日から飼育係のあとで、勉強会を開催しようと思います。青龍にもさつき話しておいたから、コレ決定ね」

夕樹が自分で拍手しながら言う。

「そういえば、青龍は？」

「なんか家に呼び出されたって、『機嫌ななめだつたよ。夕方には戻るつてさ』

「あいつんちつて、家庭の事情面倒くさそうだなあ」イサキがそう言いながら、自分の席に座る。

「まあ、人それぞれだろうけどさ。うちなんて髪染めだけで包丁もつて追っかけ回されたしわー」

暁彦がなだめるように言ひ。髪を明るい茶色にしているが、その裏にそんな事件が……。

優香が驚いていると、暁彦は歯を見せて笑う。

「あはは。大丈夫だよ。オレンチつてみんな武道の達人揃いなんだよね。だから、いろいろ頭が固いんだよ」

「何しろ暁彦の親父さんは空手の師範。兄貴も姉貴も空手の世界チャンピオンつて家だからね。イベントに来たときに会つたけど、眼光が普通じゃなかつたね」

「オレが服飾デザインやりたいって言つたら、空手をしないのなら家から出て行けって言われたんだよねー」

暁彦はえへら、と笑う。

「へええ。オレンチはフツーの公務員だから。体力有り余りすぎて家のあちこちぶつ壊したから、思いつきり暴れられる学校がいって言つたら、ここを勧められたんだよな

「あはは。イサキらしつちゃらしこと思わない？」

暁彦が優香を見た。

ああ、そうか。同じ寮でずっと暮らしている彼らはきっとお互の事情を知っている。

何も知らない優香のために、それをわざわざ話に出してくれたのかも知れない。

夕樹がここにこしながら、頷いた。

「まあ、みんな家ではもてあまされたつていうか。僕なんて陰が薄すぎるから家にいても存在を忘れられるくらいだし」

「青龍は何にも話してくれないんだけど、どうも家と折り合い悪いのか、家がらみの話題はしない方が良いよ。機嫌悪くなるからね」「そりなんだ……」

「というか、機嫌がいいのを見たことがないような気がするけど。青龍は大抵話題に入つて来ることもないし、チャットでも入室しきても必ず一つとROMるという有様だった。いつもつまらなさそうに外を見ている。

この学校の生徒は自分の特技を認められて入つてきているので、とてもびのびしている。なのに、青龍だけはつまらなくてしかたない、様子だった。

それを見ていると、優香はどこか胸の奥につかえるような気持ちになる。

飼育係の仕事はだんだん楽しく思えてきていた。

最初せつせと手作業で餌を運んでいたが、入り口に餌の袋をセットしたら、自動的にえさ箱に配分してくれる仕掛けになつていて、それを教わったので、力仕事は必要なくなつた。

動物たちは優香の声を覚えたのか、吠えたり暴れたりはしなくなつた。

飼育小屋にいるのは大小十数頭の生き物たち。遺伝子組み換えや、違法な実験で生まれたが、そうした施設がもてあましたらしいというのが学生達で囁かれている。

だけどそれはこの子達のせいじゃないよね。

優香はそう思つと、動物たちに名前をつけてあげよつと考へた。学校に申し出たらOKももらえた。

「シロちゃん、ご飯ですよ。」

優香が話しかけると、鱗の間から羽毛を纏つたような巨大な蛇がするすると這い寄つてくる。背後に男子四人が並んでそれを見ている。

「何度も見ても信じられないよな。」
「絶対オスなんだぜ。女の子に色目使つてるんだ」

「オレも吠えられたし、引っかかれそうになつたし」

「す」いねえ。東雲さんつてトツブブリーダーとかになりそつ

青龍だけは何も言わず、しばらく黙つてそこにいたが、やがて小屋内の掃除を始めてしまつ。

「おーい青龍。今日の勉強会来るんだろ？」

夕樹がそれを見て追いかけながら声をかけた。

どんなに無視されても、無愛想にされても夕樹は平然と青龍に声をかけるし、気も遣わない。へろんとして陰が薄そうなのに、そういうところではきちんと主張する。

「東雲さんもくるんでしょ？ 苦手な科目とかある？」「全体的に苦手だけど……特に数学が自信ないから」

正直に答えると、イサキがここにこしながら頷いた。

「気が合うなあ、オレもだよ」

「イサキは全教科赤点だろ」

「そう言つ曉彦もだろ」

補習大明神と赤点大魔王は健在らしい。

そういえば、授業中、よく寝ているんだよね、この二人。

「……がんばろうね、期末」

優香も、成績表が保護者に直送されると聞いて、せっかく後見人になつてくれた叔父に酷い成績を見せたくない、一大決意した。この学校は通常の教科はそんなに難しい内容ではない。むしろ、今まで通つていた普通科の高校より、簡単なくらいだ。もつと勉強したい生徒は選択科目で補つていいかららしい。

だったらがんばれば苦手な科目を克服できるかもしれない。

「……何度も説明すれば、その薄っぺらい脳みそにこの公式が入るんだ？」

青龍が怒りを隠そうとしない口調でイサキ、暁彦、優香の三人を一瞥した。

寮の共有スペースにある皿彫室に事前許可を取つて「ログループ勉強会」が毎日開催されることになった。チーム活動の会議室にも使えるように、六人掛けのテーブルと椅子が置いてある。

「とにかく、理解できなければ、一百回書いて公式を覚えろ。そうしたら、問題の通りに式に当てはめれば答えは出る。あとは算数の世界だから」

そう言つと、三人に紙を渡してわざと自分はイヤホンを耳に突つこんで雑誌を読み始める。

「…………う、う、厳しい…………」

「ぶつぶつこいながりイサキは公式を書き始める。

優香も言われたとおりに書き写し始める。とにかく、青龍の教え方は身も蓋もない。

一通り説明して理解出来ないと氣づくと、ひたすら書け、と言つ。けれど、本当に何度も書いていると、頭の中に否応無しに言葉が浮かんでくる。

ひょっとしたら教え方、上手いのかも。

そう思つていたら、青龍と田が合つてしまつた。

「サボるなよ。おじさんの息の根止める氣か？」

「縁起でもないこと言わないでよ。ホントになつたらビリするの」伯父さんが成績表を見たら卒倒するかも。などとイサキたりと騒いでいたのをしつかり聞いていたらしい。

「悪いことは口にしちゃいけないんだからね。悪いものを呼び寄せるんだから」

そう言い返すと、相手はふと吹き出した。

「なんだそりゃ、オカルトかよ」

そう言つて笑つてゐる。何がツボにはまつたのか。けれど。

……笑うんじやない。ちゃんと。

笑つてゐるところを初めて見た。

「うわー。明日は大嵐だ」

イサキたちが畠然としている。

あれ？

優香はふと気づいた。青龍はイヤホンをつけたままで、じぢぢの会話を聞き取つてゐる。

無関心な振りをしていても、ちゃんと気に掛けていたのだらうか。

……それとも、悪口言われてるかどうか、聞いていたとか？

思つたよりじぢぢを気に掛けているのだと気づくと、優香は少し安心した。

誰も寄せ付けない、誰とも打ち解けない。それで耐えられる人なんていないとと思うから。

……せめて、学校にいる間誰かと話しているのかなあ。

「遊んでないでがんばろうねー。」、「九時までしか借りられないんだから」

夕樹がふわりとした口調で言つ。 そついえばいたんだと思うほど、彼のステルス機能は健在だ。

「東雲さんは、初めての試験だし、わかんないことはどしどし訊いてねー」

グループの成績になるから、というだけで心配しているわけではないと分かるほど、彼らは優香のことを見てくれている。

「まあ、危ないのはこの一人なんだけどね」

「大丈夫だよ。今回こそ赤点コンプリートはないから」

「コンプリート……つて。無邪気に笑うイサキの顔を思わずまじまじと見てしまった。

さすが赤点大明神というべきか。

何とか公式が頭に入ったところで、練習問題を繰り返して、その日の勉強会は終了した。

女子寮との共用棟は廊下で繋がつてゐる。寮に戻ろうとした優香を、夕樹が呼び止めた。

「東雲さん、ちょっと相談なんだけど」

「……？」

「来週、選択授業のときに僕の外部依頼に付き合つてくれる？ 似顔絵が描ける人を連れて行かなきやいけなくて。先生に訊いておいて欲しいって言われてたんだ」

「授業の一環で、つてことですか？」

「そう。ただ、女の子にはちょっときつい依頼なんで、断つても大丈夫だよ」

「……？」

「本物の事件捜査の手伝いをするんだ」

え？ 犯罪関係の授業を受けているからって、そんなことまで
るんだろうか？

夕樹に誘われて受講したコースは、犯罪心理学や、人間の顔を復
元するプログラムとか、かなり専門色が強かった。

まだ全然ついて行けていない優香だが、それでも時々夕樹が依頼
を受けてどこかに出かけるのは知っていた。夕樹はプロファイリン
グの研究をしているらしくて、教師の補佐に出かけているらしい。

「出来れば僕はグループをもつと上に引き上げたいんだよ。個人
への依頼のポイントは大きいからね。うちのグループだと暁彦がデ
ザインコンペとかで稼いでくるくらいしかなくってね。あとは青龍
の全国模試の成績くらいか

「……グループのポイントになるの？」

「うん。結構大きいよ。他のグループはほとんど個人依頼で稼いで
るからね」

「だつたら、やります」

少しでも役に立てるのなら、やつてみたい。
自分に出来ることがあるのなら、やつてみたい。

「無理だつたらそこで言つてよね」

「了解」

優香は大きく頷いた。

暗い室内で、男の横顔が携帯電話の「ティスプレイ」に青白く照らし出されていた。

小さく舌打ちすると、男は秘書の篠田に電話をかける。

「……どうことなんだ。藤堂家が動き出したといつのは」

『先方は、優香様の存在を今までご存じなかつたようです。藤堂の前会長が動き出したとなると、隠しきるのは難しいかと。鳳凰学園のことも知られてゐる可能性が高いです』

今更何を言つてきたところで、優香の後見は美園家で引き受けている。戸籍上何の関係もない藤堂家側の主張が通るとは思えない。

それでも、何らかのプレッシャーをこちらにかけてくる可能性もある。

「とりあえず、隠したところで無駄なら、情報をくれてやればいい。法的に見ても、向こうが不利なのは間違いないんだからな」

『それはそうですが。優香様にはどのようにお話をすれば?』

「本人は母方の祖父母が生きていることを知らないはずだ。すでにこちらの手の内にあるのだから、放つて置いても問題ないだろ?」「三日とおかずに手紙を送つてきている律儀な姪は、こちらの思惑には関係なく、あの学園になじんで来ている様子だった。

思ったよりも打たれ強いらしい、と感心したが、それでもまだ現実のすべてを知つてゐるわけではない。

『ですが、あちら様はかなり強硬に出てこられてゐるようです。一通りの事情は説明して差し上げたほうが……』

篠田もまたあの娘に同情的だ。自分にも娘がいるから、放つておけないということか。

どいつもこいつも。

優香の父親は長男の義務を放棄して逃げ出した。後の混乱がどれほどのものだつたか、あの男には理解できなかつただろう。

残された者がそれを取り繕うために、犠牲にならなくてはならなかつた。

重荷だったのなら、分けてくれればよかつたのに、ぎりぎりまで抱え込んですべて丸投げしていったのだ。

そして、そのあぐく兄が妻に迎えた女が、美園家にとつてどれほど爆弾になるか。

後ろ足で砂を掛け逃げ出すような真似をした兄を許すことはできない。

残された娘に恨みがあるわけではないが、あの男の投げ捨てた重荷のいくつかは背負わせても罪の意識は感じない。

……そう思つてきた。

なのに、篠田もそのことを知つているのに、あの娘の世話を何ぐれとなく焼いているらしい。いつの間にか携帯電話も買い与えて、メールも頻繁にやりとりしているのだと聞いた。それも「おじさま」からのプレゼントだと説明したらしくて、感謝の手紙が届いてから知つた。

何も知らない娘に対して、冷淡な気持ちを貫くことができない、というのは仕方のないことなのかも知れない。

……異常なのは、こちらの方だ。

それでも篠田に造反されでは面白くない。

「わかつた。優香に対してはお前から説明しろ。事実だけを説明すればいい」

今まで藤堂家は優香の母に対しても、優香に対しても、何もしてこなかつた。

その存在は無かつたことにされていたのだ。

それどころか、生きていると分かれば、危害を与えられかねない状態だったのだ。

そのことを知れば、あの娘が藤堂家に心を許すとは思えない。

……それとも、自分はそれを望んでいるのだろうか。あの娘を藤堂家に渡す訳にはいかないのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2519y/>

あなたに届くまで

2011年12月1日19時55分発行